

|             |                      |
|-------------|----------------------|
| 氏 名         | 桐越 舞                 |
| 学 位 の 種 類   | 博士（言語学）              |
| 学 位 記 番 号   | 博 甲 第 7513 号         |
| 学位授与年月日     | 平成 27 年 7 月 24 日     |
| 学位授与の要件     | 学位規則第4条第1項該当         |
| 審 査 研 究 科   | 人文社会科学研究科            |
| 学 位 論 文 題 目 | 韻文の言語リズムに関する実験音声学的研究 |

|     |        |     |            |       |
|-----|--------|-----|------------|-------|
| 主 査 | 筑波大学   | 教 授 | Ph.D.（言語学） | 池田 潤  |
| 副 査 | 筑波大学   | 准教授 | 文学博士       | 金 仁和  |
| 副 査 | 筑波大学   | 准教授 | 博士（言語学）    | 那須 昭夫 |
| 副 査 | 筑波大学   | 助 教 | 博士（文学）     | 池田 晋  |
| 副 査 | 大東文化大学 | 教 授 | 博士（言語学）    | 福盛 貴弘 |

## 論 文 の 要 旨

本論文は、日本語の韻文の音読資料にみられる言語リズムを実験音声学的手法に基づいて実証的に論じるものである。リズムは、時間軸に関係する要素のグルーピングや繰り返しを指す用語である。日本語の言語リズムについては様々な分析単位が提案されてきたが、自然リズムのような繰り返しを指すこともあれば、音楽リズムのようにグルーピングを指すこともあり、グルーピングも繰り返しも持たないものを指すことさえある。これら各種のリズムが明確に区別されてこなかったことが、従来の研究の問題点とされる。

モーラ数に共通した制約を持ち、日本語母語話者であればおよそ類似した発話をする韻文は、自然発話に比べて時間軸に関する縛りが強い。このような特徴を有する韻文を利用すれば、分析方法に規則性を持たせることが可能になる。そこで、著者は「韻律フレーム」というものを仮定して、韻律フレームが存在するのか、どのような繰り返しがあるのかといった点から言語リズムの分析を進めていく。韻律フレームとは、韻文において「句の発話の開始から次の句の発話の開始までのまとまり」を指し、句の発話の直後にある休止も含めた単位である。俳句を例にとると、第1句と直後の休止を含めた第2句の開始点までがひとつの韻律フレームで、第2句と直後の休止を含めた第3句（最終句）の開始点までがもうひとつの韻律フレームとなる。

実験の被験者は、韻文や音読に関して特別な知識や技術を有さない青年層の日本語母語話者である。著者は、いわゆる専門家の音響特徴ではなく、日本語母語話者が有する日本語の韻文の音響特徴に日本語のリズムの本質を求めている。

本論文は、第1章「序論」、第2章「俳句の音響分析」、第3章「短歌の音響分析」、第4章「詩の音響分析」、第5章「結論」という5章構成になっており、各章の概要は以下の通りである。

第1章では、本論文の題目にある「言語リズム」と「韻文」という用語について先行研究をふまえて批判的に論じ、リズムを自然現象や身体に関する「自然リズム」、音楽に関連する「音楽リズム」、言語に関する「言語リズム」の3種に大別し、さらに、音楽リズムを「音楽リズム」「拍子」「パルス」、言語リズムを「強勢リズム」「音節リズム」「モーラリズム」「長短リズム」「フット」「四拍子」に細分した上で、時間間隔について

のグルーピングの有無と繰り返しの面から整理している。その上で、俳句、短歌、詩の音読資料にみられる言語リズムを韻律フレームに着目した音響音声学的分析により実証的に論ずるという論文の目的を設定する。

第2章では、俳句を対象に3つの実験を行う。実験1では俳句形式・定型の韻文を用いて無意味語の音読資料を分析し、韻律フレーム長の比率が被験者間でほぼ一定（第1フレーム、第2フレーム、最終句が全体の約40%、40%、20%）となることを突き止めている。この比率が韻文らしさのひとつの特徴を示していると考えられる。また、無意味語で構成された音読資料であっても、それが韻文だと指示を受ければ韻律フレームの比率がほぼ一定となることから、ことばの意味や解釈に左右されない韻文らしい音読の仕方が存在することを示している。実験2では俳句形式・定型の韻文を用いて同アクセント型から成る有意味語の音読資料を分析し、文節構造が異なっても韻律フレームの比率が近似した値となることを確認している。実験1・2で韻律フレームに含まれる休止が極端に短くなったり消失する場合があったため、実験3で休止の出現頻度やその条件を探り、第2句が3モーラ+4モーラ構造の場合に休止が消失する可能性が最大になることを明らかにしている。

第3章では、短歌を対象に3つの実験を行う。実験4では短歌形式の韻文を用いて無意味語の音読資料の特徴を探り、韻律フレーム比率が第3フレーム>第1フレーム>第4フレーム>第2フレームとなること、そしてこの差が休止の調整によって生まれることを突き止めている。実験5では短歌（現代語）の音読資料を分析し、韻律フレーム比率が無意味語と同じ型となるが、韻律フレーム比率の差がより大きくなることを発見している。第1フレームおよび第3フレームで休止の挿入量が増大し、第2フレームおよび第4フレームで休止の挿入量が減少するか消失するためである。実験6では短歌（古典語）の音読資料を分析し、韻律フレーム型は短歌（現代語）と類似するが、内部構造は無意味語と類似することを明らかにしている。

第4章では、詩を対象に2つの実験を行う。詩では音数で機械的に句を決められないため、音声学的発話句とその直後の休止を韻律フレームとする。実験7では7音と5音（ないしこれに近似する音数）が繰り返す定型の詩、実験8では定型以外の詩を分析し、詩に特有の韻律フレーム型が存在し、同じ詩でも被験者によって発話と休止のタイミングが異なることを確認している。

第5章では、韻律フレームという共通の分析方法を用いて日本語の韻文がグルーピングや繰り返しの有無、また等時性についてどのような特徴を有するかを論じる。従来、俳句や短歌といった韻文の言語リズムは同じものが繰り返すという性質を持ち、韻律フレーム同士の等時性が常に成り立っていると考えられてきたが、韻律フレームには韻律フレーム同士の大小関係を示す型が存在すること、そして韻律フレームの内部構造である発話比率と休止比率は韻律フレームの大小関係を保つために変動することを実験音声学的分析により実証している。序論で行ったリズムの分類に実験を通して新たに得られた知見を加え、リズム単位に「グルーピング」「繰り返し」「等時性」があるかどうか、もしくは必須であるかどうかによって整理し直すと右図のようになる。

|        |    | 繰 り 返 し                     |                |                        |           |
|--------|----|-----------------------------|----------------|------------------------|-----------|
|        |    | あり                          | 必須でない          | なし                     |           |
| グルーピング | あり | 韻律フレーム                      | 音楽リズム<br>長短リズム |                        | 必須でない     |
|        |    | 自然リズム<br>拍子<br>強勢リズム<br>四拍子 | フット            |                        | 等時性<br>あり |
|        | なし |                             |                | パルス<br>音節リズム<br>モーラリズム |           |

韻律フレームは主観的にはそれぞれが同価値であると感じられるが、韻律フレーム同士の等時性は必須の要素ではない。著者は実時間長を基準とした分析を行うことで、主観的には同価値に感じられる韻律フレームの客観的構造を明らかにすることに成功している。俳句と短歌は同じ五七五という音数形式であるが、俳句の韻律フレーム型、短歌の韻律フレーム型と呼ぶべきものがそれぞれ存在する。詩は俳句や短歌よりも複雑で、よ

り多様な韻律フレーム型を有しており、定型のものと定型以外のものではそれぞれ傾向に相違がみられる。韻律フレームという単位を散文や自然発話にも適用することによってそれぞれに特有の型を見出し、韻文との違いを明らかにすることが今後の課題となる。

## 審 査 の 要 旨

### 1 批評

日本語の言語リズムのこれまでの研究では、「モーラを繰り返す」という枠組みから抜け出せず、実験音声学的手法を用いてもその仮説をトップダウン的に検証するにとどまっていた。その現状に対して、音響音声学的手法を用いてボトムアップ的な分析を果敢に行い、新たな枠組みを得たのが本論文である。

本論文の学術的意義は大きく分けて2つある。まず、リズムという用語が様々な分野で用いられ、言語リズムを含め複数存在するリズムの概念が明確に区別されてこなかったことを指摘した点に大きな意義がある。自然リズム、音楽リズム、言語リズムは下位範疇を有し、それぞれのリズムの概念も一定ではない。それに対し、本論文ではリズムにグルーピング、繰り返し、等時性という3つの基準を設けた上で、これらの基準の要不要によってリズムとされるものを体系的に分類した。その結果、日本語のモーラリズムが強勢リズムや音節リズムとは異なるグループに分類される結果となった。モーラリズムが言語リズムとして異質であることを主張した点は、これまでの研究にはない新たな知見だと言える。

本論文のもうひとつの意義は、音響音声学を駆使したボトムアップ的な分析の結果、韻文の言語リズムの分析に最も有効なのは韻律フレームであることを発見した点にある。この韻律フレームの比率が一定の基準で現れることが俳句、短歌、詩に共通した特徴である。これに加え、俳句・短歌・詩それぞれを特徴づける個別的要素も明らかにされている。韻律フレームは著者が独自に発見した単位であり、今後の言語リズム研究に対する多大な貢献が期待される。

なお、無意味語における定型韻文からデータを積み上げていくことで析出された韻律フレームが、本論文では俳句、短歌、詩に適用されているが、文法構造や意味、情緒などをふまえた場合にどのような補正が必要であるかについては、検討の余地が残る。また、もし韻律フレーム比率の特徴が散文や話しことばにも適用できれば一般音声学および一般言語学にとっても顕著な貢献となるが、本論文がまだそこまで到達できていない点は否めない。しかし、これらは本論文の成果をふまえて研究を推進することによって将来解決すべき問題であり、学位論文としての価値を損なうものではない。

### 2 最終試験

平成27年5月14日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。